
IS <インフィニット・ストラトス> 封印されたIS

鍵山雛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> 封印されたIS

【Nコード】

N6709R

【作者名】

鍵山雛

【あらすじ】

ドイツの遺伝子強化試験体の試験管で目覚めた記憶の無い少年のお話

その男子が軍の命令でISに入学して生活するお話

世界観

『IS』

正式名称『インファイニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォームスーツ。

しかし『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は『兵器』へと変り、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた。所謂、飛行パワードスーツ。

しかしこの『IS』には致命的な欠陥があった。

それは、女性にしか使えないと言う事。

そこでは世界各国から集められた少女たちが候補生としての勉強に日々励んでいる。はずなのだが、ある一人の、男でISを動かせる織斑一夏がIS学園に入学。周りは当然女子ばかり、一夏には幼馴染の箒を初めとした気の強い性格の子や、乙女な女子が集まってくる。そんなハーレム鈍感主人公の一夏。オリ主人公と共に波乱万丈の、教師も生徒も全て女と言うハーレムスクールライフが！ハイスピード学園バトルラブコメディー！IS インファイニットストラトス この作品は、原作ISの二次創作です。殆どが、作者が妄想を書いたものです。（キャラ崩壊可能性有り）

目覚めは液体の中

ゴボツ

彼の意識は液体の中から始まった。

目の前にいるのは科学者共。

何故だろう？俺？僕？私？儂？我？自分には知識が、理性がある？

俺？僕？私？我？自分は作られた。目の前にいる科学者共クスによつて
ならば産まれたての俺？僕？私？自分には何も無いはずでは？

目の前のクスどもがわめく。知識、魂の定着を確認、だと？

そうか、俺？僕？自分はそうなるように作られた、ということか。

何を目的としているのかはよく分からん。

だが、自分を作り出してくれたことには感謝しよう。

「はじめまして。産まれてきてくれてありがとう。」

こいつは誰だ？なぜ・・・語りかけてくる。

だが・・・自分にはまだ、情報がたりない。

なら・・・全てを消せ

解からない全てを抹消セヨ

そう・・・何故かそう頭に響く

液体が吸水され・・・自分が出された

そして・・・自分によってきた人間を殺した

そのあと・・・数人殺したら一人の科学者に捕まった

離せ・・・離せ・・・離せ・・・

だが・・・そいつは離さなかった

そして・・・俺は意識を失った

そこは檻の中・・・

自分は目覚めたら・・・

檻の中だった

自分はその中では大人しくしていた・・・

暴れても・・・無駄と分かっていたからだ

自分には疑問があつた・・・

なぜ？自分は一人の男を振り離せ無かつたと・・・

数日後・・・

俺の目の前に・・・二人の男が来た

一人は軍人と分かつた

だが・・・

もう一人は・・・俺を取り押さえた男だった

軍人が俺を見てこう言った

「おい遺伝子強化素体ナンバー44」

俺も口を開いた

「何か用か」

軍人は銃を向けた

「何か用かだと貴様・・・」

「待て・・・銃を納めろ」

「ここでの銃の使用許可は取ったはずはないが」

軍人は焦っていた

「だが・・・しかし」

「納めろと言っている」

「はい・・・わかりました」

軍人は銃をしまった・・・

「我、いや・・・俺に何か用か？」

「貴様が気絶している間にいろいろと研究させてもらった」

「それが・・・なにか？」

「貴様にはISの相性が良いことが分かった」

「何が・・・言いたい」

「最強の兵器ISに乗ってみたいなか？」

「俺に軍人にでもなれと・・・」

「そうだ・・・」

「ここからも出してやろう」

「そして・・・君が知りたい情報も教えよう」

「どうだ？」

「良いだろうと・・・」

俺は軍人となった

数日後・・・

俺は檻から出された

出てから服を渡された・・・

だが・・・上着を着るのは大変だった

何とか覚えた・・・

情報を覚えるのは大変だった・・・

ISの基礎知識を覚えるのは意外と楽しかった

そして・・・いきなり実験室^{ラボ}に連行された

そして・・・麻酔をかけられ何かを入れられた

数時間後・・・

目が覚めた・・・

そして鏡を渡された

俺の顔を見たら・・・

右目が深紅ではなく・・・金色になっていた

そして・・・俺には上官みたいな人から封筒が渡された

名前：霧雨狼牙

所属：大尉

所属：ドイツ軍IS配備特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』

いきなり大尉だった

軍隊の知識は一番最初に叩き込まれた

だが・・・いきなり大尉はありえない

そして理由が・・・特例だった

最初から大尉だったのはISが原因だったからだ・・・

そして・・・専用機の名前は第三世代型IS『シュバルツェア・ゴスペル』（黒い福音）

『シュバルツェア・ゴスペル』それが封印された曰く付きのISの名前・・・

紹介と恐怖と初めての土下座（前書き）

感想がないと作者は寂しいので・・・

感想をよろしく願います。

何かアドバイスやこうしたらいいんじゃないかなと思った方は書いてください

気が向いたらで良いです

よろしく願います。

紹介と恐怖と初めての土下座

それからすぐに・・・

部隊の隊長と副隊長に挨拶に行った・・・

俺は移動の間はずっと手錠で拘束されていた・・・

まあ・・・仕方がないのだから

そして・・・着いた

ドイツ軍IS配備特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』のブリー
フィングルームに

部隊長と副隊長が来た・・・

拘束が解かれた

そして・・・俺を連行していた軍人は言った

「これから・・・『シュヴァルツェア・ハーゼ』に入ることになった霧雨狼牙大尉だ」

そして・・・自分も名乗った

「霧雨狼牙大尉であります」と・・・

そして・・・紹介が始まった

銀髪の軍人が名乗った

「私はラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ・・・」

「この部隊の隊長だ」

俺は頭を下げる

「よろしくお願いします」

「次は私か・・・」

黒髪の軍人が名乗った

「私はクラリツサ・ハルフォーフ大尉だ・・・」

「この部隊の副隊長だ・・・」

また・・・頭を俺は下げる

「よろしくお願いします」

「次は私だな・・・」

次は背の高い黒髪の女性が言った

「私は織斑教官だ・・・」

俺は何故か無意識に土下座をしていた

「お願いいたします」と・・・

大きな声で言った

俺は初めて恐怖というものを感じた・・・

土下座と言っ言葉もやり方も知らないのに俺はしていた・・・

初めての土下座を・・・

それからの訓練は大変だった・・・

俺はまだ軍隊入隊してから・・・まだ、間もないので訓練は拷問だった

基礎からなので・・・死ぬほど、きつかった

それが・・・ずっと続くと信じて

織斑教官とお別れ・・・（前書き）

正直の話・・・

訓練内容は書きたくないのだ・・・

織斑教官とお別れ・・・

それから・・・数カ月経った

俺は基礎もISも人並みにできるようになった

それでも・・・教官には助けて貰ってばかりだった

俺は訓練をしていくうちに・・・

いろいろな人と仲良くなった

仲間ができた・・・

隊長も副隊長も最初は厳しかったが・・・だんだん仲良くなった

でも・・・自分は教官に何もできなかった

だから・・・自分は強くなろうと思った

教官に追いつくために努力も訓練もあきらめなかった

だが・・・教官は日本という国に帰っていくことになった

俺は・・・悲しかった

俺は何時の間にか泣いていた

教官は言った

「泣くな糞餓鬼」

俺は涙を拭いて言った・・・

「教官！」

教官は言った

「いいか・・・糞餓鬼泣く暇があったら自分を鍛えろそして・・・強くなれ」

「はい！」

そして・・・数日後

教官は日本に帰って行った・・・

新しい趣味と挫折と言つ名の諦め・・・（前書き）

諸般の事情によりISの名前を変えました。
ごめんね

新しい趣味と挫折と言つ名の諦め・・・

織斑教官が日本に帰ってから俺は・・・いろいろな事に挑戦をした

また教官に会えるようにと・・・日本の事に勉強をした

特に興味を持ったのが・・・和と剣術と日本料理だ

それをドイツでやるのは大変だった

『シュヴァルツェア・ハーゼ』（通称・黒ウサギ部隊）の副隊長クラリッサ・ハルフォーフ大尉に聞いた所

色々と教えてくれた・・・（本当は・・・色々間違っている）

俺はまず・・・日本料理について勉強をした

大尉によると・・・

「日本料理は生の魚を捌いて食べると」

そう、聞いたとき日本人は凄いなと思うほどだ・・・訓練もなく生魚を食べるなんて

それは・・・日本でやろうと諦めた

次は和について勉強をしようと思っていたのだが・・・

狼牙の訓練が始まった・
・
・

さらばドイツ・・・ようこそ日本（前書き）

まだ全然ですが・・・

頑張って書くので色々よろしく願いします

祝10000PV みんなありがとう

さらばドイツ・・・ようこそ日本

織斑教官が日本に帰国してから数カ月経った頃・・・

上官から声がかかった・・・

俺は何だと思いながら・・・

ブリーフィングルームに向かう

そしてこう言われた・・・

「来年の四月に日本のIS学園に入学することを命ずる」と・・・

「なぜ？来年の事を今に言うんですか？」

「君のISは第三世代型だね」

「はい・・・」

「君の専用機は第三世代型だからデータ収集を目的にIS学園に入学というわけだ・・・」

俺は納得した

「解かりました。ですが・・・男でISが使えるのは私だけですし些か問題がありませんか？」

上官は笑いながら言った

「その点に関しては問題がないようにしてあると・・・」

「そして・・・これから君には日本に行ってもらおう」

俺は驚いた

「・・・え？・・・」

「驚く事はない・・・此処の局長の霧雨博士の家だ」

俺は啞然とした

「はぁ・・・」と

俺は思い出したことを言った

「ですが・・・上官IS学園の専用機持ちは国家代表候補生でないといけないと聞いておりますが・・・」

「大丈夫だ・・・上にも話は通っている。君は代表候補ではないが・・・特異ケースで許可が下りている」

「解かりました霧雨狼牙日本に行きます」

「で・・・その霧雨博士とは何所に」

扉が開いた

「すみません遅れました・・・」

上官が呆れながら言った

「遅いぞ・・・いったい何してた」

扉を開けた男はこう言った

「すみません・・・機体の調整に時間がかかりすぎてしまってます」

「まあいい・・・急いで帰国準備をしろ」

「はい」

俺は驚いていた・・・

「なぜ・・・貴様が此处にいる」

「俺を・・・取り押さえそして俺を軍に入らないかと誘ってきた男が・・・」

「ああ・・・君か、そういえば自己紹介がまだだったね」

「俺の名前は霧雨龍一だ・・・よろしく」

そして・・・俺は日本に向かった

俺の専用機「黒い福音」とともに・・・

さらばドイツ・・・ようこそ日本（後書き）

来年にはIS学園に入学という設定にしてみました

オリキャラ紹介とそのIS（前書き）

そろそろ・・・いいかな～と思った

オリキャラ紹介とそのIS

名前：霧雨狼牙

性別：男

年齢：15

性格：おとなしいが・・・危険な時もある 仲間にやさしく・・・

自身の敵には容赦はしない

階級：大尉

髪色：黒

趣味：日本文化と人形制作と罨制作

好きなもの：日本文化と人形（人形の収納ケースは本人が背負っている棺桶）

遺伝子強化素体ナンバー44

自身には目覚めるまでの記憶なし・・・

ドイツ軍の記録には同名の名前の人間が死亡と書いてある
眼帯は右

ラウラと同じ『黒ウサギ部隊』所属

サバイバル訓練でハサミで罨を作り敵部隊を壊滅させた

ISについて・・・

シュヴァルツェア・ゴスペル（黒い福音） 作者不明

イメージは「シルバリオ・ゴスペル」（銀の福音）の黒版

戦闘能力も同じだが・・・

武装には自作人形にISを搭載した自立砲台（本人制作）

待機形態・黒い逆十字のネックレス

オリキャラ紹介とそのIS（後書き）

まあ・・・こんな感じかな

次も・・・時間ができたら書くよ

挨拶（前書き）

祝20000PV

いきなりだからびっくりしたよ

感想・疑問お待ちしております

挨拶

日本についてから早数日

俺は今・・・京都にいる

それは何故かって

京都観光をしているからだ

数日前・・・

霧雨家に挨拶行つたのだが・・・

家の門に一人の女性が立っていた鬼の形相で

龍一は顔を引きずりながら言つた

「ヤバ・・・・・・・・」

その声を聞いて門の前に立っていた女性は悪魔のように笑いながら近いてきた

龍一は全速力で逃げたが・・・女性に捕まつた

女性は怒りながら

「あなたああああ」

龍一は頭を下げながら

「すみません」

女性は怒りながら言った

「いいえ許しませんよ」

龍一は泣きながら何度も土下座を下げながら

「すみません許して下さい」

女性は呆れながら

「この話は後でしましょう」

女性は俺を見て驚きながら言った

「そういえばこの子は・・・」

女性は泣きながら

「まさか・・・狼牙」

「はい、ですが・・・あなたは一体？」

女性は驚きながら

「・・・・・・・・え？・・・・・・・・」

女性は目が覚めたように頬を二回叩いたあと狼牙に言った

「失礼しました・・・貴方があの子に似ていたから」

「私の名前は霧雨優華と申します」

「よろしく願いますと」

優華は狼牙にこう言った

「ささ・・・此处で立ち話もなんですし中にどうぞ」

「はい・・・」

それから数日して

優華さんが興味があるように聞いてきた

「狼牙さんはどっかいきたいところがありますか？」

「ええ・・・まあ京都ですかね」

俺は苦笑いした

「そうですね・・・行ってみますか京都に」

優華さんが誘った

「是非・・・」

その時の狼牙の目は修学旅行の前日に控えた子供のような眼をしていた

そして今に至るわけだ・・・

挨拶（後書き）

色々とはすけどあとで直します

狼牙 in 京都（前書き）

結構・・・空いちゃった。ごめんね
理由は・・・ドジでやっちゃった（涙）

内容は京都編

京都といったら何がある・・・

それは・・・文化遺産それとも・・・おいしい和菓子？

いや、それは・・・なんだろうな

狼牙 in 京都

只今・・・霧雨狼牙こと狼牙は某神社で筍の串焼きを喰っていた

狼牙はそれを・・・喰いながら一冊の本を読んでいた

その本のタイトルは「これでわかる京都のすべてさあ・・・これで君も京都マスター」

狼牙は読みながら思った

「この本・・・凄く嘘臭いけど・・・面白いな」

その瞬間・・・絶対嘘だと思うような気配が周りから来た

そして観光に戻るわけだ・・・

そして・・・京都観光をしてお昼時に俺は、湯豆腐を食べていた

「この湯豆腐旨いな・・・京豆腐帰りに買っていこう」と思った狼牙であった

「そろそろ・・・部隊へのお土産を買っていこう」

と思ったが何を買っていいかわからない

少し・・・悩んだが

「そうだ・・・電話をしよう」と

電話のリストから・・・大尉を選択し電話をかけた

そして・・・ドイツ軍基地の一人の女性の電話が鳴った

「そこ！少し遅いぞ」

その女性は部隊の隊員に指導していた

「あ・・・電話が鳴っている 誰だこんなときに」

と少し不機嫌になりながらその女性は電話をとった

此处から・・・電話の会話です

「もしもし・・・こちら霧雨大尉だハルフォーフ大尉か？」

「はい、霧雨大尉お久しぶりです」

「すまないなこんな時間に」

「いいえ・・・何故電話を何か問題が発生しましたか？ 部隊を送りますか？」

「いや・・・部隊は必要ない 現在京都にいるのだがお土産は何がいいかと思って電話をしたまでだ」

「少し待ってください」

そのハルフォー大尉はいきなり部隊に緊急招集をかけた

「何ですか？お姉さま」と部隊の隊員が言った

「霧雨大尉から電話があった 京都の土産は何かいいか聞いてきた」

「お姉さま・・・私たちは八つ橋が良いです」

「そうだな」

「霧雨大尉八つ橋をお願いします」

「了解した」

「あと・・・大尉にお願いがあるのですが」

「なんだ？」

「あの・・・漫画を買ってきてはくれませんか？」

「わかった買ってこよう」

「ありがとうございます」

「そうだ・・・隊長には何を買ってこようか？」

ハルフォー大尉は暗そうに言った

「日本刀です」

「……は……?」

「日本刀だそうです」

「……………」

「そうか……わかった」

「それでは失礼する」

「霧雨大尉」

「なんだ……」

「今度からクラリッサとお呼びください」

「わかった。なら今度から狼牙と読んでくれ」

「了解しました」

そして……数日後

シュヴァルツェ・ハーゼの宿舎に大量の八つ橋と漫画と日本刀が届いた

狼牙 in 京都（後書き）

まあ・・・こんな感じかな

狼牙IS学園に入学する（前書き）

今回は結構飛ばします

もう、4月でいいや・・・

狼牙IS学園に入学する

4月それは・・・桜の咲く時期であり入学の季節である

霧雨狼牙もIS学園に入学するのである

狼牙はIS学園の入り口で言葉を漏らした

「なんか・・・気分が乗らない」

それは仕方がない・・・

なんたつて・・・IS学園はアラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約があり、それ故に他国のISとの比較や新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。ただしこの規約は半ば有名無実化しており、全く干渉されない訳ではないというのが実情である。

敷地内にはIS訓練用のアリーナの他、2人1部屋の学生寮や食堂、大浴場も設けられている。女性だけの使用が前提となっているためである

簡単に言えば女子校である

「軍の命令だから仕方がないか・・・」と思いながら狼牙は溜息をした

「何を・・・そんな来て後悔した顔をしている」

「おはようございます 教官」

「今は、教官ではない織斑先生と呼べ」

「了解しました 織斑先生」

「そういえば・・・織斑先生此処にもう一人俺、ではなく私と同じ境遇の男性が学園に入学したと聞きましたが・・・」

「ああ・・・それは私の弟だ・・・」

「そうですか・・・」狼牙は苦笑いしながら思った

「ところで・・・霧雨お前はちゃんと専用機は持ってきているか？」

「はい・・・」

「どうした？」

「いいえ・・・ただ此処にいたら何か思い出せそうな気がして」

「そうか・・・そういえば霧雨は入学試験はしていなかったな」

「はい・・・」

「そうだな・・・今からやるか？」

「先生がよろしいのならやりますけど・・・で、対戦相手は？」

「山田先生でいいか・・・それとも私とやるか」

「織斑先生となんとなんて圧倒的に無理ですよGシステムを使わないと」

「Gシステムじゃないと無理か・・・なら、Vシステムならどうだ？」

「織斑先生だと完全に破壊されてしまいます・・・あと、あれは基本大量殺戮用のシステムです」

「なら・・・試験は山田君でいいか」

「了解しました」

結果は・・・狼牙の勝利で終わった

狼牙IS学園に入学する（後書き）

なんか・・・疲れちゃった

今度・・・GシステムとVシステムを紹介するかも・・・

早く知りたかったら・・・Vシステムは「ガンダムヴェルフェーゴール」

Gシステムは「ロックマンの獣化版だよ」

GシステムとVシステム（前書き）

どうも、みんなのアイドルでもない作者だよ

ここから頑張るよ、多分・・・

まずは福音の紹介だね

GシステムとVシステム

霧雨狼牙のIS「シュヴァルツエア・ゴスペル」（黒い福音）
まあ・・・完全に言えば銀の福音のパクリなんだけどね

ちゃんと全身装甲なんだよフルスキン
さて武装紹介だ！！！！

黒の鐘シュヴァルツエア・ベル

主砲。全砲身36門の同時展開を可能にした

さらに格闘武装に電撃内蔵のワイヤー
スレイブーウィップ

相手に向ければ撒きついて電撃攻撃
さらに物理干渉しつつ跳ね返って電気の牢獄が完成する
まあ・・・当分は完成しないけど

さらに・・・人形型自動砲台
ドールズウォー
人形戦争狼牙命名

スレイブーウィップに乗りながら人形が攻撃する

欠点・・・ときどき人形が絡まり人形もろとも相手を黒焦げにしちやう（笑）

そろそろ本題だね

VシステムとGシステム

Vシステム

正式名称ヴェルフェゴールシステム

使用者の理性は保たれるが何時暴走するかわからないシステムなのでリミッターが付いている

武装は・・・

大出力ビームサーベル

ヒートワイヤー

ストライククロー×2

ダブルソニック砲

黒い福音の形態変形

頭の羽を手に変換し巨大なクローアームにする

さらに腹部にダブルソニック砲を内蔵し火力は計り知れない
装甲の色も赤色に変色する

ただ・・・自分の身より敵を倒すことが優先順位になる

そして・・・Gシステム

正式名称ゴスペルシステム（別名：ウルフシステム）

使用者本人の感情がそのまま力になる

この状態になったら理性を失いただ全ての者を殺すことも躊躇しない危険なシステム

自身の装甲をパージして防御を必要最低限にして機動性と攻撃力を爆発的に上げるシステム

見た目はロックマンのグレイガビーストの全て黒色

武装はグレイガクロー（ウルフクロー）（バリア無効化付）

動き方は飛ぶというより走って動く

GシステムとVシステム（後書き）

作者は頑張ったよ

結構これ体力使ったよね

学校があるから更新が遅れるよ（あ、元から不定期か）

作者はときどき束口調になるからね

記憶の無い狼は学校で何を見る（前書き）

みんな

おひさひさだね

ちよつと最近・・・

忙しい作者だよ

学校つてめんどくさいね

でも作者も頑張るよ

狼牙「さつさとやれ」

狼ちゃんひどいよ　ひどいこと言つ子には女の子にしちゃうよ

狼牙「すまんかった」（土下座）

冗談だよ　今度から雛ちゃんって呼んでくれたらね

狼牙「いつか殺してやる」

それでは始まるよ

記憶の無い狼は学校で何を見る

「全員揃ってますねー。それじゃあ、S H Rをはじめますよー」

黒板の前でにつこりと微笑んでいるのは、さっきの自己紹介が本当ならば女性副担任こと山田真耶先生である。身長低め、黒縁眼鏡はずれて、服のサイズすら合っていない。

……なんというか、『子供が背伸びしている』的な不自然さを抱くのはきつと俺だけではないはずだ。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。」

『……………』

副担任という立場の人がここまで丁寧な口調で挨拶をしているのに、教室の中は変な緊張感に包まれ、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いしますっ。えとっ、しゅ、出席番号順でっ」

「これは……しんどいな」

狼牙の席は織斑一夏という男子生徒の一番後ろの席である狼牙はそ

の視線を少なからず受けていた

「眠いから、そうだ！寝ていれば終わる」

と思った狼牙だったが・・・織斑一夏の自己紹介が始まったので寝るにわいかなかった

「織斑くん 織斑一夏くんっ」

「は、はい！？」

「こいつは一体何を驚いているのだ？俺には理解しきれん」

そう思いながら狼牙はやっぱり寝ることにした

「zzzzzzzzzz・・・」

「霧雨くん 霧雨狼牙くん」

「はい・・・ああそうですか自己紹介ですね」

狼牙は目を擦りながら自己紹介をした

「霧雨狼牙だ」

「現在・・・ドイツ軍所属だがよろしく男で2番目のIS操縦者のようだ・・・あと、記憶喪失です」

「あの以上ですか？」

「以上です」

そして狼牙は着席し寝る体制にした

「zzzzzz・・・」

そして・・・前からパンツ！と音で目が覚めた

どうやら話し声が聞こえる

「げえっ、関羽!？」

また・・・前から音がした

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

「あ、山田先生って本名は山田麻耶っていうのかー」と狼牙は周りと遅れて山田先生の本名を理解した

「い、いえ。副担任ですから、これくらいしないと・・・」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。」

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠一五才を一六才までに鍛え抜く

ことだ。

逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

「流石・・・教官だ」

「キヤ　　！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「あゝ五月蠅いなゝ耳を押さえていよう」

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。」

それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

織斑先生は本当にうつとおしそうな顔をしていた

「きゃあああああああつ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして？！」

「教官の拷問がどんなににしんどいか・・・甘く見るなよ」

「で、霧雨何を考えていた？」

「いえ、何も・・・」

「霧雨寝ていたようだな・・・」

「げえ・・・ばれてましたか・・・」

そして・・・織斑先生から出席簿の一撃が俺の頭に直撃した

「ふん、これで目が覚めただろう」

「はい、ありがとうございました」

「やばい結構いたい教官の一撃は・・・」

「だから・・・織斑先生だ。わかったな」

「わかりました」

「で？ 織斑と霧雨お前たちは挨拶もまともにできんのか」

「すみません」

「いや、千冬姉、俺は・・・」

「織斑先生と呼べ」

「・・・はい、織斑先生」

「え・・・？ 織斑くんって、あの千冬様の弟・・・？」

「それじゃあ、世界で唯一男がISを使えるってのもそれが関係して・・・」

「いや、それはない」

「なんで？」

「俺はよくわからないが織斑くんならわかるかも・・・」

「え？俺？よく俺もわからない」

「そうなんだ」

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らはISの基礎知識を半月で覚えて貰う。その後実習だが、基本動作は半月で染みこませろ。いいかい、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

「流石織斑先生だな」

そして・・・一時間目が始まった

1時間目終了

「ISの基礎理論はやっぱり眠い ドイツ軍で色々本を読み漁ったからな」 あてられても問題無い それにしても日本に来てからの懐かしさと眠さは何なんだ？」

放課に目が覚めて狼牙は辺りを見まわした

「何だこの視線は殺気ではないが凄く嫌な予感がする」

そつしたら・・・1人の生徒が俺の前に来た

「誰だお前」

「誰だとは失礼だな」

「なら名乗れ 生憎他人の名前を覚える主義は無い」

「お前は最初に会った時と全く変わらないな」

「？」

「ああ・・・そうだったな今、記憶が無いんだっけ」

「俺の名前は織斑一夏だ よろしく今度から一夏と呼んでくれ」

「霧雨狼牙だ これからよろしくなら・・・狼牙と呼ぶがいい」

「これが・・・教官の弟かスタイルに問題なし 戦闘能力はあまり期待できないな」

狼牙は小声で言った

「？なんか言ったか？」

一夏は頭に？マークを付いているような顔で言った

「いや、なんでもない」

「そうか・・・」

「・・・ちょっといいか」

「え？」

「・・・・・・箒？」

「・・・・・・」

「なあ・・・一夏、誰だ？」

「篠ノ之箒だ」

「廊下で良いか？」

「お、おう」

「一夏に用か行って来い そして俺は寝る」

そして俺は腕を枕に寝た

次は二時間目

「
であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ
」

教科書をすらすら読む山田先生これがいぐらいに歌に聞こえる

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

「あ、えつと……」

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

「先生」

「はい、織斑くん」

「ほとんど全部わかりません」

「え……。全部ですか……。？」

「え、えつと……。織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれぐらいいますか？」

シーン……

「……織斑入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている どうしても駄目なら霧雨を頼れ」

「わかりました」

「ああ……あと霧雨起きろ」

パンツ！

「痛ったあゝ」

「何時までも寝ているからだ」

「角は痛いです」

「霧雨」

「はい！」

「織斑にISのことを教えてやれ どうせあいつはわからんだろうから」

「了解しました」

「山田先生、授業の続きを」

「は、はい！」

2時間目終了

「ちょっとよろしくて」

「へ？」

「zzzzzz・・・」

「なあ、狼牙起きろ」

「どうした？一夏またわからないところがあったのか？」

「まだ、教えて貰ってもねえだろう」

「あんまり怒るな カルシウムを摂れ 牛乳をやるから飲んで落ちて着いて 俺を寝かせろ」

「ふざけるな」

「いやゝすまんすまん で、一夏こいつは誰だ？」

「俺も知らん」

「そうかなら・・・他人だな」

「訊いてます？お返事は？」

「あゝ五月蠅い眠いから一夏任せた」

「ちょ・・・おい・・・」

「zzzzzzzz・・・・・・」

「ああ・・・寝ちまつた で、用件は？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なんですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないのかしら？」

「・・・・・・」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？狼牙あと、起きろ」

「なんだ？」

「代表候補生って、何？」

狼牙はため息をついた

「はあ、いいか一夏、代表候補生っていうのはだな国家IS操縦者のその候補生とゆうことだ！まあエリートみたいなものだ！」

「なるほど」

「そう！エリートなのですわ！本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解してただける？」

「そうかそれはラッキーだ」

「馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運って言ったんじゃないか」

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思いましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが・・・」

「俺はルール無用なら負けないのだがな」

「ISのことでわからないことがあればまあ・・・泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？ISを動かして戦うやつ？」

「それ以外・・・あるか」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ教官」

「俺は危うく殺しかけたが・・・」

「「は・・・？」」

「わたくしただと聞きましたが」

「「女子ではってオチじゃないのか？」」

「貴方たちも教官を倒したて言うの？」

「ああ」

「うん、まあ、たぶん」

「たぶん！？たぶんってどどういう意味かしら！？」

「落ち着け　でかい声を上げるな」

「えーと、落ちつけよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ

」

キンコーンカーンコーン

「つ．．．！またあとできますわ！逃げないことね！よくって！？」

三時間目開始

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違って織斑先生が教壇に立っている 山田先生までノートを手に持っていた

「寝れない寝たら殺される」と、言いながら一生懸命起きていた

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席．．．まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点で各クラスの実力推移を測るものだ。そして一年間変更はないからそのつもりで」

「はいっ織斑くんを推薦します」

「わたしは霧雨くんを推薦します」

「私もそれが良いと思います」

「お、俺!？」

「さて他はいないのか自薦他薦は問わないぞ」

「ちよつ、ちよつと待った!俺はそんなのやらな

」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権は無い選ばれた以上覚悟しろ」

「い、いやでも

」

「待つて下さい!なつとくがいきませんわ!」

「そのような選出は認められません!大体男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ!わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります!わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであつて、サーカスをする気は毛頭ございませんわ!そして、ドイツの軍人も女性にはヘタレになつてしまいましたの?大体、文化として後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で

」!

プチっ。

カチン。

「誰が誰がヘタレだって言ってみろ！！古いだけ取り柄の国はよほど口が減らないようだなかつての女王もよほど口が減らないんだろっな」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

あ

「あつ、あつあなた達ねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「決闘ですわ！」

「いいだろう人前に出れない姿であげくの果てにI Sごと炭にしてやる」

「いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
いいえ奴隷にしますわよ」

「「ハンデはどのくらいつける」」

「あら、さっそくお願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデ付けたらいいのかなーと」

「俺は純粹に殺して良いかと聞いているだけだ・・・」

その瞬間・・・クラスからドツと爆笑が巻き起こった

「お、織斑くん、霧雨くんそれ本気で言っているの？」

「男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

「織斑くんと霧雨くんはISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎだよ」

「じゃあハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、男子はジョークセンスがあるのね」

「ねー、織斑くん霧雨くん。今からでも遅くないよ？セシリアに言っ
て、ハンデ付けて貰ったら？」

「男が一度言いだしたこと覆せるか。ハンデは無くてもいい」

「えー？それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」

「さて、話はまとまったなそれでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と霧雨とオルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

「あ、あとオルコット」

「はい！」

「霧雨に殺されないように抵抗しろよなんせあいつは本気モードになると私と同等に強いぞ」

「それってまさか・・・」

「ああ・・・あいつの二つ名はドイツの抹消人形だ」

「あの時も山田先生相手に手加減していたのだから・・・」

「あれですか・・・」

「ああ・・・まあ軽く殺しかけていたがな」

「霧雨狼牙・・・」

記憶の無い狼は学校で何を見る（後書き）

やっと始まったねー学校編

実はねこれ・・・

4日前からやっていたんだけど・・・
疲れて更新するの忘れていたんだよねー

感想どしどし募集しちゃうよー

狼牙の一日（前書き）

やっとこのころ更新できたよ
テスト何それおいしいの？

狼牙の一日

それからの授業は俺は寝ていた　まあ・・・何回か織斑先生の出席簿を受けたが

「いったあゝ　何をするんですか？」

「お前が寝ているばかりで全然聞いて無いからだ」

「それなら・・・しかたがないですね」

「自覚しているのなら・・・ちゃんとしろ」

「織斑を試してみる・・・」

「はい？」

俺は一夏を見ようと首を動かした

「どう・・・思う？」

「頑張つて解かろうとしていますけどあれは解かっていないですね」

「あいつを教育するのがお前の仕事とだ」

「えゝめんどいですチェンジで」

「すると思つか？」

「やればいいんでしょう」

「そうだ」

それから俺は授業を聞いていますと言わんばかりの顔をしながら目を開けて寝ていた

放課後

一夏は屍になっていた

まあ仕方がないISの専門用語の辞書なんて無い理解するしかないのだ

「大丈夫か？一夏」

「ああ・・・なんとかなるか!!」

「まあ・・・理解しろ」

「できたら・・・苦労するかあああああああああ」

「いちいち騒ぐな!!俺が本気で教えるとドイツ語になるけど大丈夫か？」

「日本語で・・・お願いします」

「まあ・・・ゆっくり教えてやる」

「すみません」

昼休み

俺と一夏は学食に向かった。その後から女子たちがぞろぞろと全員付いてきた。一夏は定食で俺はカリーマイト（チーズ味）を食べていた

それから・・・教室に戻って山田先生が来ていきなり部屋が決まって今日から寮生活って言われて鍵を渡されて荷物をどうしようと思っ
んでいたら・・・織斑先生が来て荷物は手配しておいたと言われた

「でも・・・着替えはどうしよう？軍服と寝巻きはどうしよう・・・」

「

「事情を話したら優香が詰めたようだ」

「優香って織斑先生は優香さんとは知り合いなんですか？」

「当たり前だ私と優香は元IS操縦者だから・・・」

「なら・・・あの戦闘能力は理解できる」

「まあ・・・兎も角これで荷物は大丈夫だろう。他に問題があるか？」

「はい」

狼牙が手を挙げた

「何だ・・・霧雨」

「もちろん・・・棺桶に入っていますよね？」

「当たり前だ・・・お前の私物はあれしかないだろう」

「なら・・・中のノートパソコンが大丈夫か心配です」

「なら・・・さっさと行け」

「はい!!」

「今日から寮暮らしか・・・後、明日から対専用機戦の訓練だな」

「そうだな」

「今度は武器でも持ってくるか」

「なんで？」

「軍隊式に教えるため」

「いいです・・・」

「でも・・・武器はあるなIS戦闘で」

「そういえば・・・一夏はなんか特技は無いか？」

「剣道を少しやっていたな」

「なら・・・剣道場で練習だな」

「なんでだ？」

「ISにも操縦者の相性がある」

「一夏の姉、即ち織斑教官もとい織斑先生は刀1本で優勝したんだ。なら・・・一夏には剣もとい刀の方がやり易いだろう」

「なるほど・・・ならそこは箒に頼むか」

「なんでだ？」

「箒は剣道の全国大会の優勝者なんだ」

「それは・・・面白いな俺も戦ってみたいぞ」

「じゃあ・・・今度、箒に頼んでみるか」

「俺も頼んでみよう」

「そつえば、狼牙は専用機を持っているのか？」

「ああ・・・あるぞ」

「俺のISは軍用だからなリミッターが付いているが広域殲滅を主とした特殊射撃型の高速度型のISだ」

「本当なら高感度ハイパーセンサーが無いと捉えにくいけど・・・リミッターが付いてるから大丈夫だろう」

「待機形態はこのネックレスだ」

狼牙は一夏に待機形態のネックレスを見せた

「なあ、狼牙何でお前の専用機は黒い逆十字なんだ？」

「昔から逆十字は神の冒涇と悪魔召喚の象徴と言われているからな
黒の意味は殲滅の意味だ」

「縁起が悪いな」

「そう言っとな・・・結構気に入っているんだぞ」

「でも・・・広域殲滅なら近接武装は無いのか？」

「無いことは無いのだが変形すると近接武装があるのだが・・・火力がな」

「え？変形するのか・・・」

「ああ・・・まあな、そうすると別のISになるみたいなんだ」

「変な事もあるんだな・・・」

と話しながら各々の部屋に向かった

「今日はもう寝るか・・・さて着替えるか」

と部屋を開けた。俺の部屋は一人部屋なのだそして部屋にはごく丁寧に荷物が届いていた

「寝る前に防衛対策をしておこう」

と、早々に部屋に罾を張り始めたその後荷物に隠していた武器を至る所に隠す

「さて、その前に・・・」

狼牙は荷物の中からホイッスルを出した

「いきますかぁ」

ピ

とホイッスルを吹いた

ボタン！と棺桶の扉が開いたすると・・・そこから人形が4体這い出てきた普通ならホラーなのだが自分の武器であり相棒なのであまり怖くは無い

「これを使いながら仕事するのは久しぶりだな」

狼牙は荷物ケースの棺桶を壁に立てかけて人形を巧みに扱いながら仕事をしていく

そして・・・シャワーを浴び寝巻きに着替え

「さて・・・そろそろ寝るか。晩飯どうしよう？まあ力リーメイト（フルーツ味）でいいか・・・あ、そうだ明日一夏にどんな銃を貸してやるう？」と考えながら狼牙はベットに入り一日を終えた

その頃・・・一夏は女子に囲まれ

「箒、箒さん、部屋に入れてください。すぐに。まずいことになるので。というか謝るので。頼みます。頼む。この通り」

本当に情けない一夏であった

「そういえば・・・さっきの音は何だったんだろう?」

周りの女子も疑問に思っていた

「さっきの音なんだったんだろう?」

「ホイッスルみたいだったけど」

「何で解るの?」

「運動部だからね でも・・・あの音は特別製だね」

「なんで?」

「普通のホイッスルより音が高かったから・・・あれ結構高いんだよね」

「でも・・・音は後、後それより目の前の織斑君だよね」

「ヤバイ・・・箒さん大至急入れてください」

「入れ」

「はい・・・」

一夏は箒を怒らせるとどうなるか少しは解ったようなのか？それは一夏しか解らない事である

そのあと・・・一夏がボコボコにされて狼牙から剣道の練習を頼まれたと言ったらさらに箒が機嫌が悪くなったという

狼牙の一日（後書き）

もう・・・疲れたよ

テストなんてツインサテライトキャノンで消えろー

やっとGジェネ攻略したぜテスト期間中に・・・

新たな新発見とセシリア戦（前書き）

主人公暴走・・

怖いねゝ危ないねゝ

ロッキーマン要素きたー

更新できなかったのは最近新しい小説を書いたいたからだよゝ

バカテス小説『バカと天才と音楽家』もよろしくねゝ

東方が好きな人が読んだらいいかもゝだよ

台風怖いよ・・

新たな新発見とセシリア戦

朝

狼牙は職員室にいた

「失礼します」

「入れ」

「はい」

狼牙は織斑先生に用があつた

「織斑先生整備室の使用を申請したいのですが・・・」

「何故だ？」

「一度自分で整備をしたいのと、あるシステムの解析をしたいからです。ドイツでは解析できなかったのでIS学園なら出来るかと思
い・・・」

「あるシステムとは？」

「解析はできたのですが使用方法が解からなくて・・・」

「良いだろう 使用を許可しよう 但し、放課後だ近いうちにセシリア戦が控えているのでほどほどにな」

「はい」

放課後

狼牙は整備室で自分のISを整備していた

「何なんだろうこのシステムは？ バトルチップシステムとナビソウルクロスシステム、そして・・・この獣化システム特に獣化システムは大量の容量を使うな・・・」

「一度ナビリンクシステムを使ってみるか」

カタカタカタチツ

「装甲が変わった。そうしたら獣化システムはロックされるのか・・・」

ISの姿が黒い騎士の鎧になった片手には棘付きの鉄球が付いていた

「これはISを装着しながらでもできるのか なるほど」

「あつあの・・・」

「誰だ？」

狼牙は軍人モードに切り替える

「あつあの・・・私、更識 簪って言います」

「何の用だ？」

「貴方のIS何かに似てる気がして・・・」

「何かに？」

「昔、幼馴染が作ったゲームに似てて」

「ゲームに？」

「はい、この姿は確かナイトソウルと言っていたような気がします」

「ナイトソウル」

「このISの数値を見ると攻撃と防御を中心にして機動性を無くした装備みたいです」

「詳しいな・・・他にも無いか聞いてみよう」

「このバトルチップシステムとは何だろうな？」

「さあ・・・？」

「チップとこれの事かな？」

狼牙は適当に挿してみた

「腕が剣変わった」

「凄いですね・・・」

「ああ……」

「なるほど……このチップが転送されて武器になるのか」

「他にもリンクナビシステムを調べてみよう……」

そうして……時間は過ぎていった

そして……セシリア戦の日

俺と一夏と箒はアリーナにいた

「ISの事を教えてくれる話はどうなったんだ」

「……」

「すまない一夏自分のISの整備をしていたら忘れていたで、箒は何にしていた」

「俺と剣道をしていた」

「そうか……聞いてすまなかった」

「お、織斑くん織斑くん織斑くん！」

「山田先生落ち着いてください。はい、深呼吸」

「どうやら……一夏のISが来たようだな」

「あつ・・・そうなの？」

「狼牙お前は聞いていなかったのか」

「ずっと専門書と整備室に籠もっていた」

「・・・・・・・・」

「なんだ・・・そのかわいそうな人を見るような眼は」

「狼牙・・・勝ってこいよ」

「ああ・・・行ってくる」

「狼牙はISを装着しピットゲートに進む」

「狼牙のIS変わっていたな」

「ああ・・・」

「霧雨狼牙 サーチソウル行きます」

狼牙のISは緑と黒のカラーリングになっていた

そして・・・手にはスコープガンがあった

ピットから出るとセシリアが待っていた

「あら、逃げずに来ましたのね」

「ああ・・・さつさと戦争をしたいな　ガキ相手に本気を出す愚かな俺は　そのISはイギリスの第3世代型か名前は『ブルーティアーズ』　見える限り危険なのはビット兵器とその銃だけか」

「好き勝つてに言ってくれるじゃありませんか」

警告！　敵IS射撃体勢に移行　トリガー確認、
初弾エネルギー装填

「それでは・・・お別れですわね」

「狩りのスタートだ」

狼牙はセシリアが撃ったレーザーをスコープガンで相殺した

「ありえないですわ　レーザーを相殺するなんて・・・」

「簡単だ普通の銃と一緒にだ」

「次は当てますわ」

セシリアは狼牙に銃を向けるとセシリアの銃が爆発した

「なんで・・・」

「簡単だ・・・弾が帰って行くのと同じ」

「なら・・・ビットで」

「バトルチップ「サテライト・レイ」スロットイン」

すると小型レーザー衛星が出現した

セシリアのビットが狼牙に向かった

「発射」

衛星からレーザーが発射されビットを焼いた。そして・・・残りの半分をスコープガンで破壊した

「ナイトソウル」

「装甲が変わった???」

「クラシャーホール」

狼牙はセシリアに向かって棘付きの鉄球を投げた

鉄球がセシリアに当たりダメージを与えていく

「どうしたどうしたあこれで終わりじゃないよな 兵士は敵を殺すまでが戦争なんだよ」

「たすけ・・・て」

狼牙は攻撃の手をやめない

「大丈夫か・・・セシリア」

「わたくしわこの位大丈夫ですわよ」

「そうか・・・おい狼牙いい加減にしろよ」

「此処は・・・戦場だISを装備している時点で兵器を持った兵士だそれは男も女も同じ」

「だから・・・何でここまでする」

「ここまで？おいおい一夏忘れたのか？戦場は殺し合いの場だそれ以外に何がある」

「なら・・・俺がお前を止めてやる」

「かかってきな だから俺は決闘を戦争にしろと言ったんだよお」

「私も手伝いますわ 一夏さん」

アリーナピット

「不味いな・・・」

「どうしたんですか？織斑先生」

「今の狼牙は精神的に暴走状態にある」

「それは大変じゃないですか」

「あいつは・・・本気で一夏とオルコットを殺す気だ 最悪・・・」

アリーナが蒸発する」

「ええええええええええええええええ、どうするんですか？教師を総動員しますか？」

「それでも・・・足りんな　もし・・・奴のISがこの暴走状態で覚醒したら」

アリーナ

「どうした？一夏剣一本で足りるのか？　セシリアお前も武器が無いのにどうする？」

「武器ならありましてよ　インターセプター」

セシリアの手に一本のブレードが出る

「かかってきな！！ロイヤルレッキングホール」

狼牙は鉄球を自分の周りに回し始めた

「仕方が無い・・・お前らの武器に合わせてやろっ」

「コード・・・カーネルソウル」

「嘘だろ・・・」

一夏は驚いていた

「全身の装甲が変わった」

「これが軍用カーネルソウルだ一夏、お前と同じ条件で勝負だ」

「いくぞ・・・うおおおおおおおおおおおおおおおお」

「スクリーンデバインド」

その瞬間・・・決着が着いた

「俺の勝ちか・・・」

「くそおおおお」

「まあ・・・いい楽しかったし、今回はこれ位で一夏また会おう」

狼牙のISは強制解除され狼牙は落ちていく

「狼牙・・・セシリア頼む」

「分かりましたわ」

狼牙は医務室に運ばれ目を覚ましたら織斑先生にこっぴどく怒られたのだった

そのあと・・・狼牙にISの使用禁止が出されたのであった

セシリアに謝り一夏に謝ったりと色々大変であった

次の日、クラス代表は一夏に決定したのを何時も寝ているようなの

ほほんさんから聞いた

新たな新発見とセシリア戦（後書き）

今回登場したのは・・・

ナイトソウル

サーチソウル

カーネルソウル

そして・・・

早いけど更識 簪さんでした

訓練と中華娘

「ではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、霧雨。試しに飛んでみせろ」

4月も下旬に差し掛かった頃、狼牙と一夏は今日もこうして教官の授業を受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」
せかされて、各自が己の意識を集中させる。

ISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリの形状で待機している。セシリアは左耳のイヤークラス、一夏は右腕のガンドレット、俺は黒い十字架のネックレスだ。

「ゴスペル」天使形態が一瞬で装備された。
見ると、セシリアと一夏もIS『ブルー・ティアーズ』と『白式』を装備していた。

余談だが、完全に破壊したはずのビットは、もう完全に修復が終わっていた。流石に仕事が速い。

「よし、飛べ」

言われて、セシリアの行動は早かった。一夏よりも先に急上昇し、遙か上まで上昇する。

しかし……

「やっぱりISの基本性能差か？これは」

セシリアより後に出たはずの狼牙は既にセシリアの遙か上に到達していた。

「何をしているスペック上の出力では白式のほうがブルー・ティアーズとゴスペルより上だぞ」

見ると、早速一夏は教官からお仕置きの言葉を承っている。

ちなみに急上昇・急下降は『自分の前方に角錐を展開するイメージ』

で行うらしいのだが、一夏はまだ感覚が掴めてないようだ。

「一夏、イメージは所詮イメージだ。」

「狼牙さんの言う通りですわ」

セシリアも同意する。

……しかし、いつの間になぜ？「狼牙」と読んでいる事に気がつかない「そう言われてもなあ。大体、まだ空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよ。どうやって浮いてるんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「……ごめん。やっぱしてくれなくていい」

一夏は狼牙に目で助けを求めるが、その目はこう語っていた。

『教えてやつても良いが・・・3時間はいるぞ』

「一夏っ！何をやっている！早く降りてこい！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響くので下を見ると箒が真耶のインカムを奪っていた。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんでしてよ。元々ISは宇宙空間での稼動を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位地を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

「詳しいんだな」

狼牙は素直に驚く。

余談だが、狼牙のISのハイパーセンサーは他のISとは格が違う。何せ、リミッターがかかった状態で4キロ先のアリが歩いている所まで見えるのだから。

もしも、制限が無かったら。

麗我はそんな事を考えていると、一夏の色んな事を考えているような表情に気づく。

……恐らく、筈の説明と比べているのだろう。ちなみに筈の説明は『ぐつ、とする感じだ』

『どんつ、とする感覚だ』

『ずかーん、とする具合だ』

と、素晴らしい説明をしてくれた。恐らく、この説明で理解出来るのは筈だけだろう。

「織斑、オルコット、霧雨。急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から10センチだ」

「了解しました。ではお二人さん、お先に」
言って、すぐさまセシリアは地表に向かう。

しかし、やはり地表につくのは狼牙の方が早かった。
そして、セシリアも難なくクリアした。
で、一夏は。

ギョーンッ……ズドンッ！

ものの見事に墜落していた。

「馬鹿者。誰が地上に墜落しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

「いや、それは無理があると思う」

あれは普通教えたとはいわないだろう。

「な、何！？狼牙、それはどういうことだ」

「言葉道理の意味だ筈。流石にあの『ぐっ』とか『どんっ』とかじやわからん」

隣の一夏もそうだとばかりにブンブンと首を振っている。

「大体な一夏、お前というやつは昔から……」
「？」

「そっ……それは……」

「あれを見る」狼牙が指差した先には

「大丈夫ですか一夏さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

仲睦まじく（篤視点）談笑している二人の姿が。

「……ISを装備していて怪我などするわけがないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

バチバチと二人の前で火花を散らす。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっている。……織斑、武装を展開しろ霧雨はヴェルフエゴール形態に変型しろ」

「は、はあ」

「了解しました」

「返事はいいだ織斑」

「ふむ……わかった。では二人ともはじめろ」

言われて、一夏は横を向き、正面に人がいないことを確認してから右腕を左腕で握る。

幾秒かしただろうか。

一夏の手には《雪片二型》が握られていた。

（よしっ、必ず出せるようになったぞ）

「遅い。……隣を見てみる。」

「はあ……」

そうして隣を見た一夏は、

形態変型したゴスペルを見た

一夏の言葉が口から洩れた

「・・・悪魔だ・・・」と

「もう良いぞ・・・霧雨」

「わかりました織斑教官」

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ？」

と言われた一夏は、ちらつと箒を見る。しかし、フンと顔を逸らされた。

セシリアも、狼牙もいなかった。

そして、その夜。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

IS学園の正面ゲート前に、少々怪しい少女が立っていた。

見ると、ボストンバックを背負っているの、この学園の転入生である事が推測出来る。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから取り出された紙からは、彼女の雑であり活発な

性格をよく表現していた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

……どうやら、彼女は少々方向音痴の類であるようだ。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

そついいつつも、彼女は行き先を指して歩いている。よく言えば『実践主義』、悪く言えば『よく考えない』のである。

……少しくらいは立ち止まって考えた方がいいと思うのだが。

そついう『とりあえずやってみる』主義の少女の名前は鳳鈴音、これでも中国の代表候補生であつた。

で、そのまま突き進んだ結果。

「ここどこなのよ……」

完膚なきまでに迷っていた。

学園内の敷地をひたすら頑張って歩いているが、時刻はもう午後8時を過ぎており、当然生徒は寮に戻っている時間であつた。

（あーもー、面倒くさいな。空飛んで探そうかな……）

と「ちよつとまで」と言いたくなるような結論に至つた瞬間、

「だから……でだな……」

と、鈴音には聞き覚えのある声が。

「この声……まさか」

と鈴音はドキドキする胸を抑えながらアリーナ・ゲートに向かうと、
「だから、そのイメージがわからないんだよ」

彼女の予想した声が。

（……あたしってわかるかな。わかるよね。一年ちよつと会わなかっただけだし）

彼女はそつ自分に言い聞かせつつ、けれど自分だとわからなかったらどうしようという不安に思考が乱れる。

（……大丈夫、大丈夫。アイツなら絶対気づいてくれる）

と、その少年に声をかけようとした瞬間、

「一夏、いつになったらイメージがつかめるのだ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎんだよ。なんだよ、『くいつて感じ』って」

「……くいつて感じた。いいか一夏、」

と、見知らぬ少女が目の中の少年に密着する。

「お、おい、箒……？」

「いいか一夏、これからわかるまで密着して教えてやる」

「い、いや、その……当たって……」

「我慢しろ。……私だって、恥ずかしいんだぞ……」

と、密着しながら仲睦まじく（鈴音視点）話している少年と少女。さっきまでの胸の高鳴りは嘘のように消え、変わりにドス黒い感情と苛立ちが流れ込んでいる。

（なんなのアイツ……一夏とくつついていいのはこの私だけなんだから）

それからすぐ、総合事務受付は見つかり、鈴音はすぐに手続きをします。

「ええと、それじゃあ手続きはこれで終わりです。IS学園にようこそ、鳳鈴音さん」

愛想のいい事務員の声も彼女の耳には全く入っていない。彼女の頭を占めていたのは先程見た少年と少女がくつついていた事だけだった。

（大体一夏も一夏よ。なんか、満更でもなさそうだったし……）

と、鈴音は見た者がドン引きするか土下座しそうになるドス黒い才一ヲを出しながら事務員に聞いた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「あ、ああ、噂の子の片割れ？一組よ。鳳さんは二組だから、お隣

ね。」

と、冷や汗を流しながら答える事務員。

……まさかこんな子が転入して来るなんて、夢にも思わなかっただろつ。

「それだけですか？」

「いつ、いえ、あと確かあの子一組のクラス代表になったんですつて。やっぱり、織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

そして、鈴音の目が一瞬だけキラ、と輝いた。

「2組のクラス代表つて、もう決まっていますか？」

「え、ええ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうなさるおつもり？」

もはや敬語である。

「お願いをしようかと思つて。代表、あたしに譲つて……」

（一夏、さっきの女子の話、くーーわしく聞かせてもらつたよ！）
と、少年……一夏の知らない所で、新たなる少女が決意を新たにするのだつた

中華娘と飯を食う一夏と俺（前書き）

最近いろいろな事がありました・・・
すいませんでした

中華娘と飯を食う一夏と俺

「一夏、転校生の噂を聞いたか？」

「転校生？ 今の時期に？」

朝、クラス中は転校生の噂で持ちきりだった。俺も朝クラスメイトに教えられたので知らなかったこともあり、一夏に話しかけてみたが、この様子だとたぶんこいつも今日初めて聞いたのだろう。しかし、まだ四月の段階で転入生とは、何とも珍しいことである。まあそれにはちゃんとした理由があるのだが。

「なんでも、中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

そういえばうちのクラスにも一人、代表候補生がいたな。

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転校かしら」

噂をすればなんとやら、うちのクラスの代表候補生はいつの間にか俺たちの近くにやってきていた。

「このクラスに転入してくるのではないのだろう？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

先ほど自分の席に座るところを見かけた篤も、まるでテレポーターシヨンの様に俺たちのすぐそばに現れていた。

「どんなやつなんだろうな」

「代表候補生っていうくらいだから、やっぱり強いんじゃないのか？」

しかし、代表候補生か・・・。

「気になるのか？」

「気になるんですの？」

女の子二人の声が重なる。

「ん？ ああ、少しは」

聞かれたことに正直に答えた一夏だったが、この答えに何の不服があるのか、二人とも少し機嫌が悪くなった。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるのに」

「そう！ そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けてより実践的な訓練をいたしましょう。ああ、相手ならこのわたくしと・・・なにせ、一夏さん以外で専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと狼牙さんだけなのですから」

いや、俺まだ手伝うって言ってないんだがな・・・でもまあ、他のクラスメイトだと訓練機の許可申請、機体整備に丸一日費やすので、いつでも専用機が使える俺とセシリアが相手したほうがいいのかもれない。

「ま、やれるだけやってみるか」

その気になった一夏。その言葉を聞いてか、クラスみんなが盛り上がる。

「やれるだけでは困りますわ！ わたくしと狼牙さんが協力するからには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑君が勝つとみんなが幸せだよー」

ちなみに、優勝すると学食のデザートの半年フリーパスがクラス全員にももらえるらしい。これ目当ての女子も多いのだろう。

「織斑君、頑張ってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表は一組と四組だけだから、余裕だよ」

クラスみんなが一夏に多大な期待を寄せていた。当の本人はどうやらプレッシャーがかかっているようだが。

「その情報、古いよ」

クラスの入り口から声がする。振り向くとそこには一人の女の子が腕を組んで自慢げに壁にもたれかかっていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴・・・？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

一夏の知り合いか。しかもまた女子。お前いったいどういう交友関係をしているんだ？

「何格好つけてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「んなつ・・・！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

せつかくの登場シーンを一夏に思いっきり台無しにされた凰。すると、彼女の後ろには文字通りの黒い影が。

「おい」

「なによ！？」

ものすごく痛そうな音が聞こえる。その黒い影、織斑先生の容赦ない出席簿の一撃。まあ、織斑先生にあんな口のきき方をしてしまったのだから叩かれて当然だろう。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すいません・・・」

やはりいくら代表候補生でも、織斑先生にはかなわないのだろう。鳳さんはすごすごとドアから離れて行った。

「またあとでくるからね！ 逃げないでよ！ 一夏 狼牙！」

「誰だこいつは？ 鳳とか言ったか・・・」

「さつさと戻れ」

「は、はいっ！」

ものすごいスピードで二組のほうへもどっていく鳳さん。一夏に登場シーンのこしをおられ、拳句の果てに織斑先生に出席簿で叩かれた彼女には同情してしまう。

「・・・一夏。今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「狼牙さん、あの子って一夏さんの知り合いなんでしょうか・・・？」

「俺は知らん・・・」

一夏へのクラスメイトからの質問の集中砲火。

「ああ、お前ら」

そんな一夏のつぶやきもむなしく、出席簿の音が響いて行く　って俺までかよ……。

「席に着け、馬鹿ども」

織斑先生に少し理不尽さを感じながら、今日の一日は始まったのだった。

「一夏のせいだ！（さん）のせいですわ！」

昼休み、箒とセシリアは一夏のところに来るなり突然を怒鳴りつけた。

「なんでだよ……」

おそらく理由は一つ。午前中だけでこの二人は、山田先生に五回くらい注意を受け、織斑先生に大体三回くらい出席簿で叩かれていた。しかしなぜ一夏のせいにされなければいけないのか。

「怒るのはいいけど理由を教えてくれよ」

しかし、一夏の願いは受け入れられず、

「いやだ」

「いやですわ」

と瞬時に却下された。まったくもって理不尽である。

（言えるわけないだろう。一夏と転校生のことを考えていたなどと）

（言えるわけないですわ。一夏さんとのようにして二人っきりで訓練するか考えていたなどと）

「まあ、話なら飯でも食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそういうのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。言って差し上げないこともなくってよ」

一夏の言葉に同意した二人と俺、そしてクラスメイト数名で学食へと向かった。

学食に着くとすぐに自販機で食券を買う。俺と一夏は日替わり定食。日によって違う料理が楽しめるから気に入っている。箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを頼んでいた。よくこの二人とは食事をするのだが、大抵はこれを食べている。よく飽きないよな、この二人。

「待ってたわよ、一夏 狼牙」

俺たちの前に一人の女の子が立ちふさがる。噂の転校生、凰鈴音さん。

「まあ、とりあえずそこをどいてくれ。食券出せないし、普通に行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

ちなみに彼女の手はすでにお盆を持っており、その上にはラーメンが乗っている。

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！ 大体、あんたを待ってたんでしょうが！
なんで早く来ないのよ！」

なんだか騒がしい奴だな。そう思いながら俺は食堂のおばさんに食券を渡した。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気をしなさいよ」

「どついう希望だよ、そりゃ・・・」

なんかもの凄いことを言ってるような気がする。この子は一夏に恨みでもあるのだろうか？ しかしここまでの話を聞く限り、この子

も箒に続く、一夏の幼なじみらしい。

「ンンンッ！ 狼牙さん？ 注文の品、出来てますわよ？」

つつい一夏と転校生を見ていたら自分の料理が出来ていることに気がつかなかったらしい。セシリアに注意されてしまった。

「向こうのテーブルが空いているな。行こうぜ」

一夏が凰を含めた全員に促す。十人くらいの大移動なので正直座れるか不安だったが、すぐにテーブルにつけたのはラッキーだった。

「鈴、いつ日本に帰って来たんだ？ おばさん元気か？ いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばかりしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうだな。一夏、この子と付き合ってるのか？」

「俺も知りたい・・・」

箒よりも親しそうに話している様子を見て、なんとなく質問してみる。まあ、箒にとっては恋敵ともいえるのだろう。他のクラスメイトも興味津々とばかりに頷いていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ・・・」

「そつだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだ」

「・・・・・・・・」

「？ 何睨んでるんだ？」

「何でもないわよっ！」

なるほど、そういうことか。この子も箒と同じような奴か・・・

「幼なじみ・・・？」

この言葉に怪訝そうに返す箒。こいつのことを知らないとなると、また違う時期の幼なじみなのだろう。

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだったろ？ 鈴が転校してきたのが小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちよつとぶりだな」

結構ややこしいな。しかし、なるほど。だから箒と凰は面識がないのか。

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？ 小学校からの幼なじみで俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

凰さんはじろじろと箒を見る。箒も対抗心を燃やしているのか、負けじと見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

はたから見ると一般的な握手だが、俺には二人の間に火花が散っているように見える。なんとというか、一夏を含んだ三角関係の予感がある。

「で、狼牙は何していたの？」

「一夏こいつは俺の知り合いか？一切面識がないのだが・・・」

「こいつはな狼牙。記憶喪失になる前の友達だ」

「誰がこいつだ！！え？一夏、狼牙は記憶喪失なの？」

「ああ・・・そうみたいなんだ」

「嘘だよね？でも・・・性格も昔と違うし　なら・・・私は凰鈴音
中国の代表候補生よ　よろしく」

「ああ・・・よろしく」

彼女と握手をするのだが、なぜだろう。相手から凄い殺意が来るのだが・・・

「ンンンッ！　わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「・・・誰？」

「なっ！？ わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？ まさかご存じないの！？」

「うん、あたしほかの国とか興味ないし」

「な、な、なっ・・・！？」

顔が真っ赤に染まっていくセシリア。なんだかセシリアは最近こんなパターンが多いような気がする。

「い、い、言っておきますけど、わたくし貴方の様な方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

自信満々で答える彼女。たぶんこれは素で言っているのだろう。まあ悪気がない分、怒る人はいる。その怒る人は俺の横にいるのだが。

「い、言ってくれますわね・・・」

「まあ、落ち着けセシリア。ご飯が冷めるぞ」

「一夏、アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん・・・」

そついうと麵がなくなっただのか、彼女はどんぶりを持ち上げ、直接

スープを飲んでいく。何とも女の子らしくない豪快さだ。

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

どんぶりを置いた彼女の口から、一夏にISを教えるという言葉が出てくる。まずいぞ、誰かさんが反応してしまう。

「そりゃ、助か」

ダンッ！と机が叩かれ、箒が立ち上がる。やっぱり反応してしまったか。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

『私だ』を強調する箒。やれやれ、どうやらまた喧嘩が始まるようだ。予想通り、ぎゃあぎゃああと騒ぎ始める箒と凰さん。まったく、もう少し周りを気にすればいいのに……。途中からどうしてもよくなってきたので、しばらく話を聞いていなかったが、最後のほうで、どうやら今日の放課後に第三アリーナで訓練をするとかどうかという話になっていた。

「じゃあ、特訓が終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

ラーメンのスープを飲み干すと、彼女は一夏の答えを聞かずに食堂を飛び出していった。なんというか、台風みたいな子だったな。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

箒に釘を刺される一夏。対抗心を燃やすのはいいが、もうちょっと

考えようがあるんじゃないだろうか。

「セシリア、俺たちも参加するか？」

ちようどいい機会なので、俺も特訓に参加させてもらおう

「いや、俺たちも放課後に一夏と特訓しないかと……。」

「や、やらせていただきます！」

「いや、元気無いたら無理しなくても構わんが」

「大丈夫ですわ！ わたくしはこんなにも元気ですわ！」

「あ、ああ……。そうか……。」

自分は元気だというアピールをするセシリアを見て、俺はなんだか放課後が不安に感じてきたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6709r/>

IS <インフィニット・ストラトス> 封印されたIS

2011年11月23日15時53分発行